BOOKS OF THE WORLD

世界の名著

アダム・スミス

31

世界の名著

31　　責任編集　大河内一男

アダム・スミス

国富論

玉野井芳郎
田添京二訳
大河内暁男

中央公論社

世界の名著　31　　©1968

アダム・スミス

責任編集　大河内一男

昭和43年3月10日初版印刷
昭和43年3月19日初版発行

発行者　山越　豊

本文整版印刷　三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷　求竜堂印刷株式会社
口絵印刷　東京プロセス株式会社
本文用紙　本州製紙株式会社
函貼用紙　特種製紙株式会社
クロス　日本クロス工業株式会社
製函　加藤製函印刷株式会社
製本　小泉製本株式会社

発行所　中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代)　振替東京34

編集委員
大河内一男
尾高邦雄
貝塚茂樹
串田孫一
田中美知太郎
手塚富雄
福原麟太郎
松田智雄
湯川秀樹
渡辺一夫
編集参与
永井道雄

装幀　中林洋子

目次

アダム・スミスと『国富論』　大河内一男　5

国富論　59

本書の構成　570

年譜　573

索引　582

口絵　カコーディのアダム・スミス小路

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

アダム・スミス

アダム・スミスと『国富論』

大河内一男

シェトランド諸島
大
西
洋
スコットランド
北
海
カコーディ
グラスゴー
エジンバラ
ニューキャッスル
イングランド
ダブリン
リヴァプール
マンチェスター
アイルランド
バーミンガム
ウェールズ
アムステルダム
オクスフォード
ロンドン
ドーヴァー
ドーヴァー海峡
イギリス海峡
パリ

アダム・スミス関係地図

アダム・スミスと私 7
スミスの生涯と著作 17
スミスにおける倫理と経済 26
『国富論』というもの 36
スミスと日本 52

アダム・スミスと私

日本くらいアダム・スミスが広く読まれている国も珍しいが、それにもまして、スミスが尊重され、スミスという人間にたいしてこんなにも親近感が持ちつづけられている国も珍しい。おそらく日本で経済学に志すほどのものは、なによりもまず、アダム・スミスの『国富論』をひもとくのであり、のちに彼が経済学のどのような系譜の立場に立つようになるかにかかわりなく、またのちに彼がどのような経済問題の専門領域の研究者として定着するかにかかわりなく、すべて、アダム・スミスはその出発点になっている。自由主義の立場に立つ経済理論の信奉者でも、またマルクス経済学を信条とする研究者でも、スミスの経済学は同じくその出発点である。

その意味で、明らかに、アダム・スミスは、日本では、「経済学の始祖」なのである。

私自身もその例にもれず、東京帝国大学経済学部に入学したとき、最初に読もうと決意したのはスミスの『国富論』とマルクスの『資本論』とだった。昭和初期、私が大学生だったころには、この二つの古典とも、すでに日本訳が完成し、前者については、竹内謙二訳もあり、気賀勘重訳も第一部が上梓されていた。そして、『資本論』については、高畠素之の名調子の完訳が出版されていた。だから、大学生は、この二つの古典のどちらも、それぞれ持味のある邦訳を通して読むことができたし、こんにちのように、てっとりばやい解説書や入門書などがまだ氾濫していなかったのだから、それだけに、邦訳にたよるとはいっても、文字どおり向こう鉢巻で読んだものだった。

けれども、そのころは、いまと違って思想統制がきびしく、とくに大学生の「赤い」思想にたいする当局の監視は想像を超えるものがあったのだから、だれもマルクスの『資本論』を正面から堂々と講義したり、読んだりするものはいなかった。ところが、同じ古典でも、スミスの『国富論』のほうは自由だった。それには、スミスが自由主義経済学の始祖だという安心感も手伝っていたし、またスミスの経済論は、明治十年代以来、日本では、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

政府も財界もこれを古典として珍重してきたのだし、国家主義や経済統制とは正面から対立する点はあっても、やはり資本主義擁護の経済論の主流だという安心感が一般に強く支配していた。

だから、大学の教師も、マルクスを云々することをやめて、スミスを講義したり、学生もまた、『資本論』に恐れをなしたり、それを敬遠したりして、アダム・スミスを読んだ。またあるものは、スミスの後継者だといわれるデイヴィッド・リカードオの『経済学および課税の原理』(一八一七年刊)を読んだ。

そうした因縁から、私もまたアダム・スミスを読みはじめた。私は高等学校(三高)のころ、いつとはなしにマルクスを読みはじめ、といっても『資本論』がほんとうにわかるはずもなかったのだが、ともかく読みはじめ、カウツキーの『資本論解説』を手引書にしたり、当時邦訳が出版されたばかりのブハーリンの『唯物史観』をむさぼり読んだりしていた。しかし、『資本論』などを公然と読むことは、もちろん当時はできなかったのだから、ひとつのなぐさめは、経済思想史的なアプローチで『資本論』を志向する、ということであった。

そこで、多くの若い経済学徒は、重農派のケネーの「経済表」を勉強し、それからアダム・スミスの『国富論』にすすみ、それを終わってから、リカードオの『経済学および課税の原理』にとりかかった。そしてリカードオからマルクスまでは、ひと飛びだった。だが、そのひと飛びは、唯物史観を正しく理解することによってのみ可能であった。マルクスの『剰余価値学説史』によると、マルクス自身の労働価値論や搾取理論に到達するステップは、ケネーの「経済表」からはじまって、スミスの経済学を経てリカードオの労働価値論につながる古典学派の発展史であった。

私が、アダム・スミスからはじめることにしたのは、ひとつには、マルクスへの過程としてのリカードオの経済学は、読んでいていかにも砂をかむような文章で、最初から経済学というものがおもしろくない退屈な学問であることを痛感したからでもあった。リカードオは、大学一年生のとき、たまたま外国書講読の時間に、大森義太郎助教授がゴナー版のリカードオの『経済学および課税の原理』をテキストにしていたから、おのずから私も一本を書棚においてはいたが、読んでおもろしいと思ったことはなかった。

講義の時間でも、大森助教授が、コール天地の服を着て、教壇に腰かけたりなどして少々行儀の悪い格好で講義をしたり、マルクス反対派の教授の悪口を歯切れのいい口調でしゃべるのが、いかにも新鮮でおもしろかったので、ついリカードオの経済学も読みすすむことになっ

てしまったが、それでも、正直言って、リカードオの経済学が魅力あるものとは、私にはどうしても思えなかった。

スミスにたいする私の関心

おのずから私の関心は、アダム・スミスに向けられた。リカードオにくらべて、スミスは文章がはるかに暢達だし、そのうえ、リカードオとちがって、スミスの経済学のなかには、たしかに固有の「人間」がかくされていた。その点が私の興味の焦点だった。そして、スミスが不朽の名著『国富論』を上梓（一七七六年）し、経済学者として有名になるよりも十数年まえ、グラスゴー大学の教授であったころ、倫理学の著作『道徳情操論』を刊行（一七五九年）し、倫理学者として当時ヨーロッパで著名な存在になっていた、という事実が私の興味をひいた。

アダム・スミス（1787年作）

スミスの経済学の基調には、「経済人」的人間が仮定されており、営利的な人間本能の発揮が「自由放任」を媒介にして社会の予定調和をもたらす、と彼が述べている点は、多くの経済学史家によって解説されているが、その場合の「利己心」や「自愛心」と呼ばれていたものが、どんな性格と背景をもつものであったかについては、なにも理解されてはいなかったし、ジェームズ・ボナーの名著『哲学と経済学』のなかでも、この点の説明ははなはだ不十分であった。私はなんとかして、スミスの『国富論』と『道徳情操論』に通じるスミスの「人間」論をつかみだしてみたいと考えた。

ながらく、通説では、スミスがグラスゴー大学の教授をしていたころ、また一七五九年に『道徳情操論』を世に問うたころ、スミスは、その師匠のフランシス・ハチェスンや総じてスコットランド派の倫理思想の影響を受けて、人間の本性を利他的なものと考えていた、ところが、彼が大学をやめ、バックルー公に随行して渡仏し、フランス滞在中、フランス唯物論者と交遊した結果、スミスは唯物論者になって帰国したのだとされていた。いわゆる「アダム・スミス問題」と呼ばれている経済学説史上の論争がこれである。スカルチンスキーその他多数のスミス研究家が、このような解釈を代表していた。

けれども私は、この解釈にどうしてもなっとくできないものを感じていた。なぜといって、スミスはその死の直前まで、壮年のころの著作である『道徳情操論』の改訂を怠らず、逝去の年（一七九〇年）には改訂増補したその第六版を刊行しており、一七七六年に初版を上梓した『国富論』は、この間数版を重ねているのだから、スミスの二つの著作は、彼の晩年、とくに『国富論』刊行後の十数ヵ年のあいだ、ほとんど併行して改訂刊行されていたことになる。死の直前、自分の意にみたない各種の草稿の焼却を友人に依頼したほどのスミスが、まったく人間観を異にする二つの主著を同時に刊行するとは、とうてい考えられないことである。そうした点からも、私はスミスの「人間」論を、総体として調べてみたいという強い気持にかられていた。

私は、東京大学の経済学部に入学したころからこのような計画をもっていたのだが、そのためには、スミスの経済学というよりは社会思想を、全体として理解しなければならないと感じたので、大学の第二年と第三年とでは、河合栄治郎教授のセミナーに入れてもらった。私の選んだセミナーの題目は、「アダム・スミスにおける『国富論』と『道徳情操論』の関係について」というものであった。

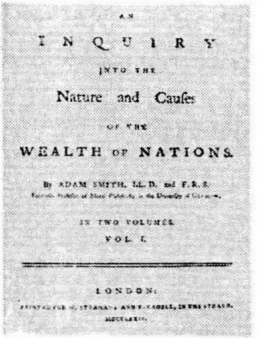
河合教授のセミナーは、当時、セミナーの統一的なテーマを学生たちに分担させるのでなく、参加者個人個人の希望をできるだけ容れ、「社会思想史」という広い範囲のなかの問題ならなんでもよかった。私は先生から、君はなにを選ぶつもりか、と聞かれたとき、アダム・スミスと答えた。そして、私の念頭にあった問題点を説明した。当時広く読まれた、河合教授の著作『社会思想史研究』第一巻（大正十二年刊）のなかには、アダム・スミスと経済学」が収録されていたが、私は先生から、それを読んだか、とたずねられたので、読みました、と答えた。それではジェームズ・ボナーの『哲学と経済学』をぜひ読むように、と注意され、私は無事にセミナーに入れてもらうことができた。

こうしてその後、私は、スミスにおける「人間」という問題にとりつかれ、もっぱら『道徳情操論』のなかでスミスがどのような「人間」を仮定していたのか、という問題と取り組みはじめ、また手に入れることのできるかぎりのスミス研究を読んでみたが、どれも私の意にみたなかった。『道徳情操論』のなかでは、「同感（シンパシー）」という言葉がしばしば使われており、それが人間に本有の「モーラル・センス」だと考えられたり、「利他心」と同義のものだと考えられやすい傾向はあったが、そこから、当時のスミスが利他的本性の人間を前提としていた、と

いう長いあいだの通説は、どうにも引き出せない――それが『道徳情操論』をかなり入念に読んでみての私の結論だった。

もちろん、当時まだ私は『道徳情操論』における「人間」と『国富論』におけるいわゆる「経済人」としての「人間」が、異質のものではないとしても、どのようなつながりがあるのか、『道徳情操論』という倫理学の書物のなかの「人間」と『国富論』という経済学の書物のなかの「人間」とが、異なった類型のものだとすれば、どの点で異なり、また同じものだとすれば、具体的にどのようなつながりがあるのかについて、明確に理解していたとは言えなかった。

しかし、両者の底流にある「人間」が同じラインに乗った「人間」であることだけは見当がついたので、私はセミナーの報告論文として、その点を概略とりまとめることにした。私は昭和四年春、東京帝国大学経済学部を卒業すると同時に、助手に採用されたが、そのときに提出した論文は、右のセミナー報告であった。


AN
INQUIRY
INTO THE
Nature and Causes
OF THE
WEALTH OF NATIONS.
By ADAM SMITH, LL.D. and F.R.S.
IN TWO VOLUMES.
VOL. I.
LONDON:

『国富論』初版扉（1776年刊）

富は生活の必需品と便益品

アダム・スミスの魅力は、その経済論の底に当時の生きた「人間」が躍動していることであり、それをスミスは、新興の第三階級として、大胆率直に、歴史の推進力として、叙述の前面におし出した。しかもその「人間」が、伝統的な特権や地位や門閥や独占などの上に座す人々ではなく、神授の「利己心」をエネルギーとして、日々の職業生活において「働く」人間、「苦労と骨折り」（トイル・アンド・トラブル）のなかに刻苦する人間である点にあった。だが、私にとってのスミスの魅力は、もう一つほかの点にもあった。それは、スミスの「労働」論ないし「労働価値」の理論であった。

スミス以前の経済学、通例「重商主義」とよばれている経済書においては、富を代表するものは金銀または「財宝」（トレジャー）であり、それを獲得する唯一の手段は、外国貿易であった。したがってまた、富の獲得される場所は、海外市場であった。産業革命まえの時代にあっては、手工的技術と低い生産力とを前提としながら、国家を富裕にするためには、自国の生産物を海外に輸出し、海外からの輸入をできるだけ抑制し、その貿易差額を金または銀で受け取り、それを保蔵することであった。とうぜん低い生産費と安い価格で輸出することが至上目的であり、

またそのためには、賃金水準をできるだけ低くおさえ、労働時間をできるだけ長くすること、そして四六時中人間が働かなければならないように強制することが、国家の労働政策でなければならなかった。

これにたいして、スミスにおいては、富というのは、もはや金や銀ではなく、「生活の必需品と便益品」であった。それで国王のための軍備を拡充し、宮廷や特権階級の財宝や奢侈品をあがなう原資としての金銀ではなく、普通の人間、つまり特権階級以外の階層の人々にとっての「生活の必需品と便益品」であった。それの多い少ないが、国が富裕であるかどうかの尺度であった。すでに富の形態が、金または銀でなく、「生活の必需品と便益品」だということになるなら、それを獲得する手段は、もはや外国貿易ではなくなるだろう。貿易差額を金または銀で受け取るというようなことは、富を獲る途ではなくなってしまうからである。

そこで、「生活の必需品と便益品」は、自国の労働によって不断に生産されうる富であり、国内における生産力が高くなれば、それだけ富の量は大きくなるし、それは外国貿易を媒介することなしに獲得できる富である。こうして、スミスにおいては、貿易ではなく「労働」が、富を創りだす手段になった。そうなれば当然、この種の富、すなわち「生活の必需品と便益品」は商品なのだから、市場で販売されなければならないだろう。

当然にこの場合の市場は、重商主義者の場合と異なり、海外市場でなく、「国内市場」だということになる。そうなれば、この「国内市場」で「生活の必需品と便益品」を購入するのはどんな階層か、その場合の購買力はどこからくるのか、それが経済学にとって重要な問題になるにちがいない。

労働が富を創る

こうしてスミスは、富の観念、富の獲得方法、市場の性格を、根もとから転換させてしまった。とくにこの場合重要なのは、スミスが富をもって人間の「労働」によって創りだされるものだと考えた点である。「生活の必需品と便益品」は、年々生産され年々消費されるものであるから、年々の「労働」によって不断に創られなければならない。そこでスミスによると、人間の「労働」は、富を創りだす根源であるとともに、またその大きさを測定する尺度でもある。

スミスの労働価値説とよばれるものがここから形成されていくのであるが、やがてこの労働価値説は、リカードオによって引きつがれ、さらにマルクスの手によって完成することになるのだが、マルクスの場合には、労働価値の理論は、たんに「労働」が価値の根源であるということが重要であるばかりでなく、人間の「労働」また

は「苦労と骨折り」によって作り出された生産物、スミスの場合の「生活の必需品と便益品」は、その直接の生産者である労働者にはただそのわずか一部だけが「賃金」として支払われるだけで、その他の部分は、あげて資本の投下者の収得するところになってしまうという、いわゆる「搾取」理論をうち出すかぎりにおいて、重要だったのである。

マルクスはその遺稿『剰余価値学説史』のなかで、労働価値論の形成とその発展を詳細に追跡しているが、そこでは、「労働」を価値の根源とみる思想が、どのような論理の展開を経て「搾取」という思想にたどりついていくかという視点で学説史を編みあげており、スミスの労働価値説にたいする評価もその点から行なわれている。

スミスは、『国富論』のなかで、土地の私有と資本の蓄積にさきだつ「原始未開の時代」においては、生産物はあげて「労働」を投下した人間自身の所有に帰したが、土地が囲い込まれて私有化され、生産手段が資本として別の人間の手もとに蓄積されるようになると、それらの所有者は、生産の結果にたいして一定の分けまえを要求するようになるから、「労働」の生産物のうちの一部分だけが労働者に帰属し、その他の部分は、あるいは地代、あるいは利潤という形で、他の階層の人々に領有されてしまう、と述べている。この点は、また、マルクスによって、スミスが「搾取」論の立場に立っているものとして高く評価されているところでもあった。

スミス立像（1867年作）

ところで、まえにもふれたように、戦前の日本では、マルクスの『資本論』を公然と読むことは不可能であったし、どこの大学でも『資本論』やマルクスの著作を教科書やテキストとして授業をすることはできなかった。「搾取」論を講義することは法度（はっと）だったからである。もちろん、多くの学生はひそかに『資本論』を読み、また難解な『資本論』は読まないまでも、「搾取」論や労働価値の思想の輪郭ぐらいは知っていた。

そこで、学生たちが、大学のセミナーやその他のグループで、いっしょに本を読もうというような場合には、『資本論』にまでたどりつく過程に位置する理論として、スミスの『国富論』を読み、リカードオの『経済学および課税の原理』を選んで、輪読し、討論した。それらの、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com